

</center>

衝撃的なことの例えで、雷に打たれたみたいって言うじゃん？

まさにその言葉通り。

君が俺の前に現れた瞬間、目の前に稲妻が走ったね。

それは、初めて俺を見た時の君も同じだったのかな。

でも残念ながら君の雷様は、想像より意地悪で生意気だけど。

この顔に免じて許してくれるかい？

第一話 雲の上の人

俺には推しがいる。そのアイドルはいつも輝いていて、最高の癒しであって、生きがいであって、雲の上の人。

だがその彼と、なぜか俺は今ベッドの上で交わってしまったている。

「はうっ！んんうううっ！やっ、あ、あ、っ、え、イツ、イツた、もう俺、出し……！！」
「うん、見てたよ。たくさん出たね」

「んえ、え、あ、ツツ、だ、だから、あ、指、もう……っ」

「俺はいくらでも、君に触れていいんじゃない？真生君は嘘つきなの？」

「ひっ、い、ちが、ちが、あ、ああっ！で、も、今はあ！」

「何言ってるの？今が一番気持ちいい時じゃない。もっと喘ぎなよ、怖かったら俺に近づいていいから」

「んああっ！あっ、ひ、ひ、いいいい……！！」

度を越した絶頂に、俺の身体は悲鳴をあげては泣いている。それでもやまない猛攻に、唾液やら精液やらも出っばなした。この終わらない快感が怖い。怖いけれど、目の前にいる

人を見ると更に現実味がなくなる。

なんで俺は、推しに抱かれているんだろう。

どうして純情なはずの彼が、こんなにもえげつなく俺を責め立ててくるんだろう。

そんな疑問を抱きつつも喘ぐしかできない俺は、憧れの人の肌をかきむしるように触れては次なる絶頂へと導かれていた。



「皆、いつもありがとう!」

テレビの中の俺の推しは、毎日素敵だ。キラキラのステージで歌って踊るその姿に、俺はいつだって励まされていた。

そんな彼を陰ながら応援しているだけでは満足できなくなって、とうとう本日握手会に

来てしまった。長い列の中で、ドキドキしながら順番を待つ。前の人が少しずつ減っていつて、ようやく自分の番がきた。推しとの初体験に、俺の興奮ボルテージは過去最高を更新する。

そして案内された先、画面越しに毎日拝んだ彼が登場した。

「こんにちは！会いたかったよ！」

「こんつ、こここここんにっ」

「緊張しすぎだつて。ほら、握手握手」

「あつ、は、はいっ！」

けれども興奮しすぎて、俺は日本語が不自由になってしまった。なんなら握手しにきたのに、カッチカチに固まって動けなくなる。それを笑顔で受け止めて、快く握手してくれ俺の推し、朔君は今日もかっこよくてニコニコしていて最高だった。初めての本物にどぎまぎしつつ、高まる胸が抑えられない。

「女の子ばかりだと緊張しちゃうから、男の子が来てくれると安心するよ〜」

「そつ、そんな、逆に男なのにすいません」

「いいよいいよ〜、全然気にしないで！ねえ、君の名前は何？」

「あ、真生って言います！」

「真生君ね、可愛い名前」

「そ、そう、ですかね？」

「うんうん、君にピッター！」

純情が売りの俺の推しは、たくさんの女性に囲まれると緊張するという欠点を背負いながらも日々頑張っている。そんな朔君に母性をくすぐられる人は絶えず、今やこの国を代表するアイドルだ。その彼に、直接名前を呼んでもらえて幸せだった。この手は一生洗わないでおこう。でも彼と話せる時間には限りがある。だから俺は、最後に応援のメッセージを言って次の人にバトンタッチしようとした。

「今日は会えて嬉しかったです！あの、俺、これからも応援して」

「ああああ、待って待って！ちょっと待って！」

ただなぜか俺が帰ろうとすると、朔君は手元のメモに何かをサラサラと書いて、それを持ったままぎゅっと俺の手を握ってきた。もしかするとファンサの神と言われているから、彼のサインを書いてくれたのかもしれない。握られた手に、カサリと紙が当たっている。まさか時間ギリギリまでサービスしてくれるなんて思ってもみなかった。俺の推しはなんて優しいんだろうか。

でも俺が感動に震えていると、時間が来たと知らせるスタッフを尻目に、俺たちを隔て

る台から朔君がちょっと身を乗り出した。そのまま耳元で、彼が囁く。

「これはここで開けちゃダメ。外に出たら見て」

「え？」

「それは俺たちの秘密だよ。先に行って待っててね」

それだけ言うとは朔君は身を引いて、またねと手を振って俺を見送ってくれた。ただ、彼の台詞はハッキリ聞き取れたのに、どういう意味なのかさっぱり分からない。俺たちの秘密とは何だろうかと思ひ、首を傾げながら会場の出口へと向かう。

見るなど言われてしまった以上、会場を出てすぐ見るのもよくない。だから少し歩いて、イベント場の最寄り駅の近くのベンチに腰をかけた。そして周囲の視線を警戒しつつ、朔君が書いてくれたメモを開く。

約束通りこっそり見たその紙の中に、確かに彼が直筆で書いたらしい筆跡はある。ただしそこに書かれていたのは、サインではなかった。

怪しげなホテルの名前と、三桁の番号。簡易的な文字列が俺に伝えようとしているメッセージに、またしてもカチンと体が固まった。

それから三呼吸分くらい時間が経過してから、俺はとにかく動揺した。

待て、待て、待て。これはどういうことなんだ？朔君は純情系アイドルだぞ。公式設定

じゃキスも未経験のはず。それなのに見ず知らずの男をホテルに誘うなんてありえるか？いや、ありえるわけがない。

しかも指定先のホテルを検索したら、ビジホじゃなくてラブホだった。あれか、最近のアイドルってキスはしなくてもラブホには行くのか。そっちの方が問題な気がするが、そういうもんなのか。

けれど「先に行って待ってて」という言葉をもらったのは確かだ。無視もできない立場上、約束を律儀に守り、現在指定された部屋のベッドに座っている。

ただ、ここに来たのはいいが、言葉通り朔君が来ることはまずないんじゃないかとも思う。彼は日本の五指に入るアイドル。一般人(♂)と何をするつもりなんだ？ドッキリ企画の一貫で、「ファンならどこまで本気にする!？」等を試されているんだろうか。

なんてぐるぐる回る頭を抱えてうなだれて、約一時間。いっそ寝てしまおうかと思っていたら、がちやりと扉が開く音がした。きつと連れがあまりにも来ないから、ホテルの人が不審がって見に来たんだ。もういいや、諦めて大人しく帰宅しよう。

そう思って扉の方へと歩いたら、サングラスをかけたマスク姿の男性が入口に立っていた。

「あ、ガチでいた」

最初は感染症対策をしたホテルスタッフでも来たのかと思ったが、その声を聞いて俺は目を見開く。そのままサングラスを外した顔を見て確信した。

朔君だ。間違いない朔君。

憧れのアイドルと、俺はラブホで再会を果たしてしまった。

きっと来ないと思っていただけに、まさかの展開だ。開いた口がふさがらない。そんな俺を尻目に、朔君はスタスタと歩いて俺に近づく。

「ホントに来たんだ。俺のこと待ってた？」

「そりゃあその、ファンなので」

「ふ〜ん？なんだ、真生君やっぱ俺のこと大好きじゃん」

「引くぐらい大好きです」

「引かないよ、むしろ大歓迎」

俺との距離を縮めた朔君は、なんの迷いもなく俺の手を握ってきた。本日何度も握られる手が熱い。けれど恐れ多い彼の手を握り返すことも出来ずに、自分の手と朔君の顔を交互に見てしまう。数度繰り返したら、彼と目が合った。その顔つきは、ステージと少し違う。グループの中では癒し系で通っている彼は、髪を上げているせいか今は大人っぽく見える。それももちろんかっこいいし、私服と思われる服もかっこいい。なにより元がいいん

だ。完璧な容姿を崩す方が難しいのかもしれない。

そうやってぼんやり見ていたら、次はベッドに導かれた。手を引かれて、座ってと言われる。大人しく縁に腰を下して、立ったままの彼を見上げた。

朔君は、クスリと笑って俺を見てくる。どういう反応をしたらいいか分からずに、ただ黙って見つめ返す。

「ねえねえ、真生君。君はこの下とか想像したことある？」

「下、って……?」

「そりゃあもちろん、服の下でしょ」

でも俺がひたすら眺めていると突然、朔君は俺の唇を人差し指で押した。その柔らかな感触の後、手入れされた綺麗な爪が彼の元へ戻っていく。たったそれだけの様子に目が釘付けになった。外せない目線を集めた指は、まずはシャツのボタンに。二個開けたと思ったら、その上のジャケットが脱げていく。はらりと床に落ちる上着を見て、また視線をあげた。緩やかに動く手は次のボタンまで伸びている。緊張で瞬きを忘れた。灰色のシャツの下、チラリと見えた地肌から目が離せない。三つ目のボタンの先には、あと二個。

でも最後の二つを外す前に、彼の手は更にも下へと滑った。その手が俺の手を取って、ある場所へと導く。

少々膨らむ硬い生地と、温かく生々しい感触。その両方を感じられる位置にあてがわれた手がピクリと動いた。一気に顔が熱くなる。俺の手は今、とんでもない部分に触れてしまっているんじゃないのか。

「真生君なら触ってもいいよ。俺の大事なところ。君にだけ許してあげる」

彼の色っぽい声に、ピクッと肩が跳ねた。朔君の大事なところに、俺は今布越しに触れている。もう少し手を突っ込めば、きっとそこに手が届くだろう。絶対不可侵の、純情アイドルの秘部に。

は、と息が出た。心臓がありったけの血液を身体に送り出している。興奮で胸が裂けてしまいそうだ。でも、朔君はキスもしたことがないと言っていたはずなのに。どうしてこんなにエロい事ができるんだ。

ドキマギしながら、この手をどう動かすべきなのかと迷う。すると朔君は、硬直する俺をさらに翻弄してきた。

「でも、君ばっかり触るのはズルいよね。だから俺にも触らせて？」

「そっ、んなのは、いくらでも」

「いくらでも？そんなこと、簡単に言ったらダメだよ」

「うわっ!？」

大胆なままの彼に、俺は易々と押し倒された。驚いて目を開いたら、その瞬間にキスされてしまう。え、なんか流れて朔君のファーストキスを奪ってしまったんだがと思いはしたが、巧みな舌使いに初心者ではないことを悟る。まあ、芸能人とはキャラ設定で惑星を生み出せる世界に住んでいるのだし、キス未経験くらいの嘘はかわいいものだろう。

それにしても、平然と俺のズボンが下げられているのはなんでなんだ。まるでマイクを握るかの如く、簡単に俺の息子さんを採まないうただきたい。あまり刺激されると勃ってしまう。そこは理性とは別の次元で生きているから。

「俺に触られて感じた？それともキスが気持ちよかったの？」

「っ、わ、わ、分かんないですけど、朔君にしてもらってると思ったら…」

「じゃあ、もっとすごいことしてあげる」

「ひいっ!?!」

ずるっとズボンが下げられて、下着越しのそれに顔を押し当てられた。ああ、アイドルがなんてことをと両手で顔を隠す。でも俺の意に反してやけに積極的な彼は、平気で俺の熱を取り出して口に啞えたらしい。指の隙間から覗けば、普段は甘い声で歌を披露する口いっぴいに、一般市民の俺のモノが入っていた。なんて暴力的な光景なんだろうか。

今すぐにも、そんな卑猥な行為はやめてほしい。その気持ちのまま、力いっぴい暴れ

るなり、髪を引いてひっぺがす等の行動を取りたかった。けれどこれで万が一彼の美しい顔に傷など付けようものなら、俺は自分を殺せる。

無抵抗の結果として、俺は性器を舐められまくった。そしてどう考えても初陣とは思えない舌使いに、情けなくも声が出てしまう。

「はあ、ん、っ、朔君、そんなこと……っ!」

「ん、ふふ、そんな事ってなあに?ちゃんと行って?」

「っ、あ、あの、フェラとか、しないで」

「フェラしたくらいで顔真っ赤。気持ちいいの? 恥ずかしいの? どっち?」

「両方……!」

「そっかそっか。だけどまだまだだ。これから真生君のコレ、いっぱい可愛がってあげるんだから。今でそんな怖がってどうするの」

「こ、怖いというか、なんかもう限界で」

「それなら、この程度で限界きちゃう真生君のやらしい声聞かせて?」

「あ、あ、んっ、んん〜……っ!」

更には言葉でも羞恥を煽られて、俺は全身を真っ赤にするしかなかった。待ってくれ、俺だってそんなに経験があるわけじゃないのに、こんなの刺激が強すぎると目をつむる。け

れど視界を塞いだところで、聴覚からも刺激はやってきた。じゆる、じゆる、とすすられると、その音だけで頬が熱くなる。摩擦を緩和するためか、タラリと唾液が落とされた。それを広げるための手コキすら気持ちいい。ぬち、ぬち、と増していく音に、俺は益々体温を高めていく。

「ふふ、おつきくなってきた」

「いつ、あ、あ、もうこんな、だめ、だめですって」

「いいんだよ？舐めて欲しいとおねだりしてごらん？」

「そんなのしません！」

「へえ、真生君って割と理性的な人間？それとも、単に恥ずかしいのかな」

朔君から言われたことは、半分当たりで半分外れだ。恥ずかしいのは正解だが、全然理性的にはなれていない。俺は現在、脳の血管が細いものから順番にちぎれていきそうなくらい興奮している。だってあの朔君が、俺の息子さんを舐めているんだ。どうして興奮せずにいられるだろうか。

それに、こんなに気持ちいい体験も初めてだ。自分でするのは全然違う。単純に朔君のテクニクによるものかもしれないけれど、俺は自分でもビビるくらいに昂っていた。見るからに、今すぐイキそうなくらいには張りつめている。

「ひっ、あ、あ、も、やばい、からあ……！だめっ、はなしてえっ！」

「出ちゃうの？じゃあ口に出す？顔に出す？」

「んっ、そ、そんなの、どっちもダメじゃ」

「選べない？それならお預けだね」

「あ……！！？」

でもいざ射精できるかもという期待感が高まっている途中で、朔君はパツと離れてしまった。確かに口内射精も顔射も拒んだが、急なお預けは切ない。へこへこ事情なく腰が上下した。いっそ自分で扱きたいところだけれど、朔君の前でそんなはしたない行動は無理だ。それなのに朔君ときたら、クスクス笑って先走りを零す俺の熱を突いてくる。くるくると先端を指先でなぞられると、たまらず腰が浮いてしまう。

「はう、うう……！！」

「イキたかったねえ。残念、でも終わりにはしないから安心して？」

「え、あ、い、イカせて、くれるんですか？」

「うん。いっぱい可愛がってあげるって言ったでしょ？」

「んんんん……！！」

ゆっくりゆっくり扱かれると、射精までの階段をスローペースで昇っているようで、腰

の周りかどろけだしそうになった。スツキリしないのは苦しいのに、触ってもらえているのが嬉しい。時々朔君が耳元で、まだイッたらダメだよ？と言ってくるからとにかく必死に我慢した。限界の射精感を根性で堪える。

先走り濡れまくっている先端部は、時々朔君の爪でカリカリと引っかかれて、俺の防波堤を破りかける。でもこれでイッたら幻滅されるかもと思って、枕を握っては内ももに力をこめて、必死で耐えた。

だめだ、イッたらダメなんだ。俺は今お預け中。朔君にもっと可愛がってもらいたい。

「あふっ、ふうっ、っ、ひ、あ、あああ、あ……ツツ……！」

「我慢できて偉いねえ真生君。俺、そういう子大好き。もっと頑張れる？」

「ひぐっ、う、う、が、んばり、ます……！あ、んうっ、朔君が、言うならあっ……！！！」
「うんうん、かわいいね。いっぱい我慢したら、すっごく気持ちよくなれるよ？その方が真生君も嬉しいでしょ？」

「っ、あ、あ……！ぎ、ツツ、あ、ん、嬉しい、ですっ！」

「じゃあ頑張ってる真生君にはいい事してあげなきゃ。ねえ、自分でこういうところ触ったりする？」

「へっ……！」

だけど朔君の可愛がり方は、俺の想像とはちょっと違う方向にそれていった。お尻の孔へと伸びていく指先に、びくりと身を縮める。

触る、というのは、今回では性感を高めるために弄ったりするという意味で間違いないだろう。俺にそっちの趣味はない。絶句して首を振った。でも朔君は、バックタイプのローションの開封に忙しそうだったので、俺の意思表示は見ていなかったかもしれない。

「や、あ、あの、そこは特にはっ」

「そうなんだ、ウブだね。遊んでない感じ好きだよ、俺」

「朔君は、結構遊んでるんですか」

「ん、どうだろ？業界的には普通くらいだと思うよ？気に入った子には自分から声かけちゃうけど、誰にでもってわけじゃないし。それに最後までしたいって思うのは、割と少ないかな」

朔君の言葉に、俺の脳の一部が石化してピキッと音を立てた気がした。そんな風に笑いながら、日本中がひっくり返るような台詞を言いつつ、人の尻にローションを垂らすのをやめてほしい。

最後までとは、俺の思う最後で合っているのだろうか。一致しているなら、キス以上に過激な発言だ。朔君は最後までを知っているのか？一応純情設定じゃなかったのか？業界

的な普通の遊び方ってどれくらいなんだよ。業界人でもない俺に、知らない世界観で話さないでほしい。純情アイドルの仮面が、目の前ではがれていていないか。どうか「嘘だよ、驚かせてごめんね？」と、いつもの調子で言っしてほしい。

だが、どんなひいき目で甘めに判定しても、こんなにも淡々と事が運ぶのはおかしいと思わざるを得ない。どこをどう考えても慣れている。キスをスマートにできるのもおかしいし、こうやって自然とエロいことができるようになるまでには、相当な経験が必要なはずだ。握手会でのメモの渡し方も含めて、俺が初犯とは思えない。

ああ、俺の知る純情な朔君はいったいどこへ行ってしまったんだ。俺の目の前にいるのは本物の朔君なんだろうか。よく似たまがいものな気がしてきた。おかしい、俺の推しはどこに？俺の知る彼は、男を押し倒して後ろをこじ開けようと指を進めるわけがないんだ。その指使いが、明らかに素人ではないことにも泣けてくる。

いや、もしかするとこれはやっぱり悪い夢かもしれない。だって、あの朔君がこんなことするわけないのだから。では目の前の彼は誰なんだという話になるが、そんなのはもうどうでもいい。誰でもいいから、俺の身体で遊ばないでくれ。切なる願いを秘めつつ、俺はひたすらに現状を嘆いた。

「う、うっ、なんで、なんでこんなことに……」

「それは君が、俺の誘いに乗ったからじゃない」

「だって！俺の知ってる朔君は、こんなことしな——」

「するんだよ」

「んぐっ！」

しかし傷心な俺が悲しみに浸る間もなく、内部に指先が押し入った。異物の挿入感に、思わず息が詰まる。反射で彼の腕を掴んだ。ぎゅっとその手に力が入る。けれども朔君の反対の手が、さっきと同じようにゆっくり俺の熱を抜いてくるから、窮屈な場所に指が入る違和感を快感が上回っていく。

「は、はっ、あ、え……!!?」

「君の大好きなアイドルの朔も、プライベートではエロい事好きなただの男。好みの相手が来たたら、唾くらい付けたくなる。君だってそうでしょ？」

「っ、や、ん、んん、だめ、抜いて、入れちゃやだ……!!」

「まあ本当は、唾つけるくらいじゃやめられないけどね。さあ、もうおしゃべりはおしまい。とびっきりのやらしい声聞かせて？」

「はあううっ!!!??」

でもローションで濡れた指が少しだけ奥まで入ると、不思議なしこりのようなものにぶ

つかった。その瞬間ガツンと、裏側から性器を押されたような感覚が襲う。パンっと身体が反って、ギリギリまで勃起している先端から先走りがどっと増えた。

「はうっ、ん、んんンンっ！あ、な、なにつ！？ん、つく、う、そこ、や……！」

「大丈夫、優しく擦るからいっばい感じて？俺の指に弄られて、えっちな気持ちになっ
ていよ？」

「ふあ、ああ、あっ、んんっ、ん、や、だ、ダメ、朔君、朔君……っ！」

「ちゃんと息して？苦しいのは嫌でしょ？声も我慢しないの」

「そ、んな、あ、や、こ、こんな声……！ん、ん、やっ、う、んんンンっ！」

ぞくん、ぞくんと自分の内側からこみ上げる快感に戸惑う。お尻の中を弄られて感じるなんて。しかも朔君に醜態を見られているのも恥ずかしい。せめて声くらいは抑えないと、自分の尊厳に関わってくる。

明らかにいやらしいことをされているとしても、推しの行動をとがめられないので、俺はひとまず両手で口を覆った。蹴ったりして朔君を止められないなら、今できるのは自分を制御することだ。これで簡易的に静かにできるはず。

しかしながら俺の行動は、彼をむっとした表情にさせて終わった。なんなら両手は無理矢理ひっぺがされて、更に俺へと近づく朔君の首に誘導される。

「何してんの？我慢しないでって言ったよね？」

「あ、で、でも、恥ずかしくて」

「恥ずかしくても口は塞いじやダメ。声は我慢しない。俺との約束守れるよね？」

「ふえ、え、っ、んっ、あ、ああ、ふっ、う、っ、くくっ！」

「こら、唇噛まないの。抵抗する気なら、もっと理性なくなるまで責めちゃうよ？」

「え、あ、待っ、ッッ！！？んんんあああああッ！！？」

接近戦の朔君の顔は、いつもよりも男性らしさがある気がした。その表情でニヤリと朔君が笑った後、緩やかだった手の動きが激しくなる。元々我慢していたので、激しくなった扱き方に耐えられる時間はそう長くなかった。

ぶんぶん首を振って、だめ、だめと繰り返す。けれど朔君の手は止まってくれず、あつという間に射精してしまった。二度、三度と精液を吐きだす。でもここで、気持ちよかつたと悦に入る暇はなかった。

熱を握る手の動きは止まったものの、なぜかイッている間、そしてイッた後も、中を弄る手は気持ちいい場所を探り続けていた。指は抜ける事がなく、延々いい所をコリコリ、すりすりと擦ってくる。

絶頂時の気持ちよさから下りてこられず焦った俺は、朔君の手を引きはがそうとした。だ

けど俺が伸ばした手は空いている彼の手に捕らえられて、再び彼の首へと導かれる。

「はうっ！んんうううっ？うあッ、あ、やつ、う、イツ、イツた、もう俺、出し……！」

「うん、見てたよ。たくさん出たね」

「んえ、え、あ、ツツ、だ、だから、あ、指はもうっ」

「俺はいくらでも、君に触れていいんじゃない？真生君は嘘つきなの？」

「ひっ、い、ちが、ちが、あ、ああっ！で、も、今はあ！」

「何言ってるの？今が一番気持ちいい時じゃない。もっと喘ぎなよ、怖かったら俺に近づいていいから」

「んああっ！あっ、ひ、いいいい……！！」

同性だからこそ今が一番きついと分かっているはずなのに、エロいスイッチが入った朔君は手を止めてくれないらしい。

もしも彼が、たまたま興奮が冷めきらずに責めているなら、冷静になった段階でこの行為は終わりになる。けれど狙ってやっているのだとしたら、一体いつまでこれが続くのかも分からない。ピクピク、ピクピクと身体が不規則に暴れた。それでも彼の手は止まってくれない。もうだめだ、助けてと身体は叫んでいるのに、優しくいなされては、耳元で卑猥な言葉が囁かれる。

「ね、ほらイクイク、お尻でイツちゃう。ああヤバイヤバイ、また来ちゃうよ？ほらほら、イクって自分で言いな？言ったらもつと気持ちよくなれるから」

「はひっ、い、イツ、ぐ、うぐうううっ！！んうっ！っ、はあ、あ、あああ、や、だめ、だめっ、強い、んんんっ、あっ！やっ、イツ、~~~~~ッッ！！！！」

「ふふ、気持ちいい気持ちいい。イキまくってビクビク止まんないじゃん。やらしい声も我慢できないね？」

「はあ、あ、ああああああっ！！いぎっ！ッ、は、っ、あ、あ、だめ、イツて、イツてるからあああっ！！あううっ、っ、も、もうだめ！だめっ、っあ、あ、イク！イクっ！ひっ、う、んんんんんんッッ！！！！」

もはや射精の余韻を伸ばされているのか、長い射精時間の中にいるのか、それすら自分で把握できなかった。どうしたらいいか分からなくなった俺は、盛大に喘ぎながら朔君に抱きついてしまう。イツている途中で憧れの人に恐れ多いことをしていると気が付いたものの、身体が跳ねては強張って、うまくコントロールができなかった。

「ひぐっ！んううううっ！！あああああ、も、もうだめ、ダメです、お、あ、ゆ、るして、んひっ、い、お、おかし、い、俺、ダメに」

「ダメじゃないよ。俺にこういうことされるの嫌？」

ダメダメダメっ、も、あ、あぐっ!」

「だからダメじゃなくて、好きっていいなよ」

「ッ、ッッ、そ、な、あ、ああッ、ゆるして、も、好き、好きだから許してええええっ!」

「わけわかんなくなってるの?かわいいね。俺もそういうエッチな真生君好きだなあ」

「あああああッ無理無理む、ん、っ?!?!?~~~~~ッッ!?!んんんんッッ!?!?!」
アイドル衣装の下にあるたくましい腕に抱えられて、散々お尻を弄り倒された。しかも策士な朔君に背中から肩にかけてをしっかりとホルドされているせいで、悶える身体は彼と密着したまま。手コキはもう終わったのに、とろ、とろ、と俺の先端から溢れる液体は切れ目がない。何が出ているのか、自分でもよく分からなかった。射精のようで射精とは違う感覚が襲う。シーツを蹴っては脚を突っ張らせて、もう無理と口にしようものならキスで塞がれた。

イキ過ぎていいのか、酸欠なのか、俺は途中からふわふわとした心地になった。前後不覚になった俺の唯一分かることと言えば、すぐ近くに朔君がいることだけだ。その体温に縋りつくことだけが、たった一つの安心材料になる。

「はあ、あ、んん、あ、あああああ……」

「だんだんとろけた顔になってきたね。ねえ、今どんな感じ?」

よ？分かんないからちゃんとと言えるようになるまで、イカせるのやめてあげられなくなっちゃうよ？」

「はひっ、ひっ、ぎ、い、イクう、ううううっ……！はあ、あ、言う、言うからああっ！！イク、イキま、あ、イツ、ひ、ツツ、~~~~~っあぁあぁあぁあぁ……！！！！イク、イクイクッ、うううあぁあぁあぁイクからあぁあぁっ！！ちゃんと、言った、言ったから許してえええっ！！！！」

だからガクガクと全身の痙攣が止まらなくなって、俺の中の収縮が激しくなって、しまいいにはゴリゴリといい場所が抉られていることすら、後追いで気づくことになった。

イキ方がおかしいと思っても、朔君は俺に微笑むばかり。涙で濡れた頬を撫でてはくれても、その片方の手が俺から抜けていくことはない。ただひたすら、もう十分すぎる程にいじめられたあの場所を延々と指先で擦ってくるだけ。俺がどれだけ泣き叫ぼうとも、終わりはない。すりすり、コリコリと。時々きゅうつと挟んでは、くびり出たところを何度も何度も撫でる。それは確かに気持ちいい。だけど度が過ぎていく。いい加減に止めてくれなければ、俺は本気でおかしくなってしまうような気がした。

無意識に動く身体と羞恥を捨てた声が、我が身の限界を訴えている。

「いいいいいいあぁあぁあぁあぁっ！！やああぁあぁあぁっ！！も、イツ、うううううっ！！ぐっ！！あぁ

あっ！はっ、はっ、ひ、い、ダメ、ダメ、おかし、んっ、——ッッあああ！んんんあああ
~~~~~ッッッ！！！！イクイク、ッッ、ああ、あ、もう止めて、やめてえええっ！！！！」  
「すごいビクビクしてる。初めてだけどちゃんと気持ちいいんだ。ウブなのに身体はエロく  
で最高だね」

「はあっ！は、あ、も、もういい、助けて、あああ、い、弄っちゃ、んんっ、イッ、イク、  
またいぐっ！う、ああっ、っ！！い、いぐっ、からあ！」

「すっごいかわいいよ。だから我慢しないでイって？もっと俺にドキドキして？誰にも聞か  
れたくないエロい声、俺だけに聞かせてよ、真生」

「ーっ、あう……ッッッ！！！」

そして訪れた突然の呼び捨てに、身体より先に頭が限界を越えた。ふわっと思考が溶け  
る。

元々大好きな、雲の上の人だ。名前を呼び捨てにされるよりヤバいことが既に始まって  
いる気がしなくもないが、やはりその声で俺の名前を読んでもらえると嬉しい。思わず心  
臓が破けてしまうところだった。

「あ、あ……っ！」

「うん、これくらいドロドロにしたら十分かな。じゃあ真生、俺に君の一番深いところまで

触らせてね」

「え、え……?」

「はい、息吐いて……」

「へ、——っっ!!!!!!????」

でも心臓がぶっ壊れる直前、別のところに生まれた衝撃で、俺の臓器は奇跡的に形を保った。けれど、何か大事なものを失った感覚を同時に感じる。驚いて目線をやれば、案の定俺の中に、甘い顔に似合わず凶悪な朔君のブツが入ってしまったているじゃないか。おいおい、最後ってマジで最後までかよと度肝を抜かれるものの、刺さっているモノが更に奥へと進んでいるせいで息もできない。

「あっ、あ、あ、な、何、なんで入って」

「そりゃあそのためにほぐしたんだから、入れるに決まってるじゃん」

「やっ、嘘……!!こ、こんなっ」

「嘘じゃないよ。分かるでしょ、俺のが入ってるって」

「んんん……!!」

一気に奥までは無理と思ったのか、朔君はゆっくり腰を前後に動かし始めた。それをリアルに感じる生々しさに、俺は現実を受け入れざるを得ない。

確かに入っている。俺の中に、まぎれもなく朔君がいる。というか裸をさらしたただけではなく、どう考えても言い逃れできないほど、明確にヤッてしまっているんだが。なんてことだ。まさか朔君とセックスすることになってしまっうなんて。いやでも朔君に限らず、男に犯されるなんて想像もしていなかった。恥ずかしい、逃げたい、もう終わりたい。

俺は巻きつけていた腕をほどいて、今度は朔君の胸を押し返した。震えながら首を振って、一旦行為をやめてほしいと訴える。

「ま、待って、一回抜い」

「やだ。だって真生の中、あつたかくて気持ちいいもん」

「っ、ででで、でも、こんなのダメじゃ」

「ダメなことなんかない。逆にもっと慌てなきゃいけないこと、してあげてもいいよ。君けっこう身体柔らかいから、色んな体位でできそうだし」

「やっ!?!」

けれど暴れていたら、ぐるんと身体が倒されて、横向きになった身体の脚だけ大きく開かれた。後ろ側に回った朔君は、上になった脚を抱えて、グイグイと俺の中に入ってくる。

「こんな脚開いて。エッチだね、真生？」

「っ、やだ、こんな……!」

「だめ。ちゃんと俺に全部見せて？」

「はっ、あ、んん、う、んっ、んうっ！」

後ろから肩に回ってきた手が、俺を朔君に引き寄せる。そのまま伸びた手で乳首を擦られながらのキスは、じんと股間に響く心地よさだった。思わず脚を閉じようとしたはずが、うっかり平きっぱなしになる程度には。

くちゅり、くちゅりと空いた片手で前を扱かれると、その快感に全てをゆだねてしまいたくなる。舌を吸い上げながら、ゆっくり奥深くまで挿入されるのも好きだ。色んな責め方を同時に受ける身体は、ガクッ、ガクッと揺れ動く。

「はう、んっ、んんんっ、あ、ああ、はっ、ああああ……！」

「ドロドロだねえ、真生。ほらここも、こんなにエロくなってる。見て？やらしいね？」

「やっ、やだ、そんなの」

「嫌なの？でも君も見てるじゃない。皆が知らない朔のエロいところ。その何が不満なの？」

朔君は咎めるように俺に言うが、朔君のエッチな部分を見られることに不満はない。ただ単に、俺が恥ずかしいだけだ。だって、あの朔君が俺相手にとんでもないことをしているし、彼の思うままに感じている俺もどうかしていると思う。でも朔君の言う通り、他のファンが知り得もしない一面を間近で見ているのは確かだ。

汗ばんだ額についた髪を、うっとおしそうにかき上げながら悪い笑みを浮かべる朔君。元々の顔立ちがいい分、些細な仕草でも様になる。それに見とれる俺の首筋を舐めた後、エロい顔、なんて言いながらつるんと勃起した熱を撫でるんだからたまったもんじゃない。色気にクラクラする。こんな至近距離で、こんなに密着して。一体俺は、今息ができているんだろうか。それすら心配なのに、朔君は楽しそうに俺を弄ぶばかりだ。

「はあっ、あ、あ、ああ、朔君、だめ、もうだめ」

「じゃあそのダメが言えなくなるくらい、もっと近づこうか」

「ひゃっ!?!」

そして想像以上に力のある朔君は、日本人的には普通くらいの体格である俺を抱えるのもお手の物だった。無理やり体勢を変えられて、座っている朔君と向き合う格好になる。近い、まさかこの状態だと急いで離れようとしたけれど、案の定逃がしてもらえず、彼の剛直で串刺しにされた。

「んんんああああああ……ッッ!!」

「ふふ、すっごい声。気持ちいい?俺に犯されるの」

「ひう、う、あ、近い、っ、深い、も、だめ、おかしく、なっちゃ」

「ならおかしくなってる真生の顔、よく見せて」



「やっ、やだ、やだ」

「じゃあちゃんと俺の目見てよ」

「それも、できない」

「なんでさっきから嫌ばっかりいうの？あんまり我儘な子は好きじゃないなあ、俺。ねえ真生、聞してる？」

「ひ……っ!？」

けれども嫌々と言っていたら、強めに名前を呼ばれた。快感や現実から逃げたくてつむっていた目を開くと、獐猛な目つきに変わった朔君がそこにいた。普段の癒されるオーラがない。カプリと耳を噛みながら鼓膜に流れてくるのは、大好きな声で作られた毒のようだった。

「どうして俺の言うことが聞けないの？目を見るのって、そんなに難しいこと？」

「っ!？ご、ごめんなさい……!みつ、見るから!ちゃんと見るからお願ひ、許して、許してください……!」

「見えるんだよね?じゃあなんで嫌って言ったの?俺はその理由を聞いてるんだよ?謝ってなんて言っていない。ほら、ちゃんと説明して」

「んううううっ!?!ふぎっ、い、あっ!あうっ!」

「自分で言えるまでコレ、やめてあげない」

「んあつ、ご、めんなさつ、ひつ、見ます、もう嫌って言わないからあつ！あぐつ、や、あ、深い、こ、壊れちゃ、うつ、いびううツッ！！」

ズドンと下から突き上げながらも、俺の頭を抱えるそのタイミンクの良さは絶妙だった。奥の奥まで朔君が入ってきて、一瞬昇天しかける。それを何度もやられてしまったことで、逆に現実には引き戻されたけれど。

強引な抱かれ方をされたせいで、ヒク、ヒク、と身体は不思議な跳ね方を見せている。それをじっくり眺められた後、あばらをたどって胸に、そして鎖骨に吸いつく朔君を、俺は虚ろに見た。彼の肩に置いた手が、自分を支えるためのものなのか、けん制のために置いたものなのか、もう俺自身にも分からない。

「やつと目が合ったね？」

「ひつ、う、う、あ、恥ずかしいから、あ、あんまり、見ないで」

「なんで？恥ずかしい所も全部見せなよ」

「そつ、そんな」

「真生、返事が聞こえないんだけど？まさか嫌なの？」

「ツ！？い、嫌じゃない、です……！！」

「そうだね、ちゃんと覚えていい子。ご褒美あげるから舌出して？」

「は、い……っ、ん、んっ、ふ……っ！」

強引ながらも、普段の柔らかな雰囲気を取り払った朔君にときめいてしまう。だから無茶苦茶なことを言われている気はしても、そのオーラに流された。舌を絡めとられて、吸われて、長い長いキスに持ち込まれても、俺にできることはない。むしろそれを受け入れよう。

撫でられる全身のあちこち、彼の手のひらが触れたところからジリジリ熱を持つ。すつと手のひらが滑っただけでも、かくんと腰が揺れ動いた。その状態で奥をじつとりこね回されると、頭の中も体内もかき混ぜられて、思考はどんどんあやふやになる。感度だけが、ひたすらに上昇した。

ゆっくりな愛撫だけでも、十分に感じてしまう。むしろ集中出来る分、強引に犯されるより快感だけが俺を追い詰めている気がした。どろりとトロけた身体が、俺ではない何かに生まれ変わろうとしている。口から出てくるのは、その鱗片のような言葉。

「んふっ、ふっ、あ、あっ、んん、だ、め、も、溶けちゃ……！」

「溶けちゃう？なんで溶けちゃうのか教えて？」

「ひぐっ、ッ、気持ち、よくてえ……！い、いっぱい、イッちゃうから」

「何が気持ちよくてイクの？」

「ふ、う、い、言えない、そんなの言えない」

「え〜？言えないなら真生の好きなどこグリグリしてお仕置きしちゃうけど、いいの？」

「ツツ！！？や、やだ、そんなのダメ……！！はう、グリグリしちゃ、あああ、お尻、ダメになっちゃうからあぁっ！」

「それならダメにされないように、なんでイクのか言ってごらん？」

「ツ、うう、もう許して、んんっ、い、イク、お尻でイッてる、朔君ので気持ちよくされてイッチャうからあ！こ、こんなにイキたくない……！！あ、あ、お、俺、そんなにされたらおかしくなっちゃうよおお……ツツ！」

「大丈夫だって、真生なら頑張れる」

「~~~~ツツツ！！！」

散々なことを言われているのに、トドメとばかりに俺の大好きな顔で微笑まれてしまつたら、もうダメだった。何もかもを忘れさせるその笑顔に、パン、と視界が弾けて、全てが分からなくなる。なんとなくイッている気がしたけれど、そのことすら意識できない。

「はひ……っ！？んお、あ、あああツツ！んんっ！んんンン！！？」

「あーあーすごい締付け。俺に犯されて、真生のココったら喜んじやってる。やあらしい

の。真生のえっち」

「やっ、そんな、違う、違うからあっ！」

「何が違うの？えっちなここは、俺に名前呼ばれる度にきゅうううって締まるのに。名前呼ばれるの好き？もっと言ってあげようか？ほら、かわいいね、真生。真生のここ、ゆっくりたくさん擦ってあげようね」

「ひぐっ！うううっ！？んっ、んんうううっ！やっ、待って、待ってええっ！！」

「待たない。さあ、君の耳まで犯していくよ」

「はふううっ……！？あ、あ、だめっ、だめえええ！そこで名前呼んだら、俺、俺っ」

「ん、真生、真生、ほら、エッチな声出しな？もっと喘げ、このままダメになっちゃえよ、真生」

「はっ、ひ、っ、んんあああああああ……ッッ！！！」

奥まで刺さった朔君のソレに犯されながら、耳までをも彼の舌で支配された。ぬるつく舌が与える柔らかで鋭い快感は、彼の声でより鋭利になる。エロくなれ、もっとイケと強い命令口調で言われる度、グサグサと脳の弱い部分を貫かれる。けれどその傷を舐め取るように、ゆったりと耳や首を舐められてから、吐息に混じって真生と呼ばれることで心が陥落していく。

一緒に頭なんか撫でられたら、ビリビリと頭皮を伝って全身に痺れが走った。麻痺してしまいそうなくらいの快感が、俺の全身に這い回っている。

でも名前を呼んでももらえたり、褒められたりしたら嬉しいけれど、それ以上に怖い。優しいのにキツイこの気持ちよさが。外堀を埋めるような彼の愛撫が。

もちろん、俺が拒むのを許してもらえないことも。

「か、は、あ、あ、朔君っ、お、俺……っ！はあっ、は、う、おろして、抜いて、きつい、もうエッチなこと、したくないよおっっ！！！」

「どうしたの？じっとしてられないくらい気持ちいい？」

「ひう、うう、ち、がっ、も、助けて、終わりたい！イケない、もう、できないっ！できない……っ！！！！！」

「そんなことないって。真生ならもっど先の快感まで耐えられるよ、きつと」

「ひぐっ！ぐっ、ああああああっ！」

けれど必死で無理だと伝えたはずなのに、強めに身体を抑えられてしまっ、俺は焦った。彼に頑張れと言われるなら、本当はどれだけでも頑張りたい。でももう無理だ、できないものではない。

言葉で交渉しても無理なら、彼を傷つけたくはないけれど力技で逃げるしかなかった。朔

君を押し返して、立膝になって踏ん張る。このままじゃあ、俺が壊される。そうなる前に逃げなければと。慌てる俺は、完全に俺を押しさえている方の手ばかりを見ていた。

だから片方の手が、まさかお尻の方に回っているなんて。その谷間を指一本でねっとり、緩やかになぞってくるなんて。その触り方は想像していなくて、一気に力が抜けてしまう。

「っ、あ……!?!」

「真生?だめだよ、俺に逆らうなんて。何をしたって、君はもう逃げられないんだからさ」  
その甘すぎる快感に力が抜けた拍子に、今までより更に更に奥まで彼が入ってきた。文字通り串刺しになった身体の奥から、今まで感じたことのない大きな波が俺を襲う。与えられた快感は予想を遥かに上回っていた。思わず天を仰ぐ。

「ひいひいあああああっ!?!?!?これやだっ、ああやだやだやだあああああっ!?!」  
「ヤダじゃないの。無駄に抵抗するからだよ?これは逆らった真生への罰。でもその様子じゃ、むしろご褒美になっちゃったかな」

「なっ、あ、いやっ、イクイクっ、ッあ、は、~~~~~ッ!?!?!?ひ、い、ばいいううう!?!んあ、お、かし、いやっ、いやあああああ!?!」

「今さらジタバタしても遅いよ。一回そうなったら簡単には戻れない。俺の気のすむまで、真生はずっとイクだけ。ここから出さなくてもイケるから、頑張っつて俺を楽しませて?」

「ぐっ、ツ、あ、はあううううツッ!! んんんっ! やっ、出来ないっ! 無理、頑張れないっ! もお頑張れないいっつっ! …!」

「頑張れなくても頑張らせるから平気」

「んぎいっ!?!」

座った朔君に抱えられながらも、俺は最後の力をふり絞って暴れた。暴れる程に快感が強くて、じっとしていられなかったとも言える。けれどそんな俺をベッドに押し倒して、朔君は俺を組み敷いた。

「ほら、自分で脚をもつて?」

「ひっ、う、お、俺、もう、ううう」

「持って言うてるんだけど? 聞こえなかったのかな?」

「あ、あっ……!」

そして無理矢理両方の太ももの下に自分の手を持っていかれて、自らの脚を開いた状態にされた。それを見て、やればできるじゃん満足そうに呟いた朔君は、俺の腰を掴んで熱を奥へとねじ込んでくる。もちろん泣き所らしきところもピンポイントに狙っては、そこをゆっくり擦りながら出ていくときもある。膨らみをカリが引っかけ出ていく快感に、腰が勝手に浮いた。そのせいで更に強調された俺の自身を、朔君は悪戯に扱いてきたりも



する。

「はううつ!!んぐつ、んんっ!や、あああああ……!!」

「すっごくかわいい。どこまでも俺の好みだよ、真生。ねえ、このままどこまで気持ちよくなれるか見せて?」

「はあっ、はあっ、っ、ん、んうう、だ、め、も、もう気持ちいい、気持ちいいから」

「気持ちいいの、もっと欲しいもんね?」

「い、らない、ひ、う、もういい、イクの辛い……!!」

「俺に口答えする余裕があるんだ?なら、まだまだ辛くしてあげる」

「~~~~ッ、あ、あ、あ、あっ、ひ、い、あ、強、い、あ、っ、ぐ、ッ、~~~~あ

あああああっ!!」

でも俺が尚も無理だと訴えたら、今までの腰づかいが手抜きだったと分かる速度で突き上げられてしまった。その快感に文字通り悶絶する。しかも二時間のコンサート、そしてアンコールまでもこなすアイドルの体力は並々ではなくて、全然終わりにならない。ガンガンと頭が鳴っている。視界はずっと前から安定しなくて、痙攣も止まらない。

「んひっ、い、いびいっ!!んあ、あ、あ、あああああっ!ひっ、う、死んじや、あ、死んじやう、いぐっ、ううつ、またイッちゃうよおお……っ!!」



ているモノは絶えず快感を送り込んでいるから、俺は甘イキを繰り返していた。その全てを解放できる権限をもっているのは、この空間での絶対者。そんな俺の推しは、絶望的な目で見てみたいそう輝いて見えた。

「はあ、ああ、っん、んん……!」

「どうしたの?もう逃げるのはやめたの?」

「っ、ごめんなさい、逃げない、もう逃げないから!はう、ん、下ろして、う、う、イツ、てる、苦しい、苦しいよお……っ!ごめんなさい、ごめんなさいイツツ!」

「そっかそっか。じゃあこれからはさ、こういうことするために俺と会ってよ。そしたら今日はおしまいにしてあげる」

「で、でも、朔君は、純情系のアイドルじゃ……!?!?」

「こんなことされても、まだアイドルの朔を信じる?純情なんか、とっくの昔に捨てたよ。あんなのは設定上のキャラだし。でも、それでも俺のことが好きならさ……」

含みのある言い方で言葉を切った後、すっと起き上がる彼。視界を不安定にしていた前髪を避けて、明るくなった世界にどアップの朔君が映る。は、と息を飲んだのと同時に、優しく一回、唇にキスが落とされた。それを呆然として受け入れれば、耳に吹き込まれるのは甘くて低い朔君の声。

「これからはアイドルの方じゃなくて、本当の朔に惚れて？」

その朔君の言葉に否定も肯定もできないままに、続けざまに施された本気のキスによって、二回、三回と俺の胸は貫かれた。出血多量で今日死ぬかもしれないとすら思う。いやいや、もうプライベートのアナタにも殺されかけてます、俺は瀕死ですと伝えたい。ただし伝えるための口は塞がっていたし、次も来ますとしっかり自分の口で言うまで逃がしてもらえなかったので、喘ぎ声が主に出続けていたけれど。

けれども強引に約束された次は、思いのほか早く訪れた。なんなら、頻繁に夜のお誘いが来るくらいだ。

更に文句を言えるならその回数があまりにも多くて、世間的にも体力的にも困っている俺がいる。